

2020年3月22日 説教「心の戸を開く」

ヨハネの黙示録3章14-22節

ラオデキヤにある教会への手紙です。七番目になります。

1. ラオデキヤの教会 (14-15節)

- ①ラオデキヤ(14)「**また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。**」ラオデキヤという町は地図にあるように、フィラデルフィアの南東80キロほどに位置していました。交通の要衝で商業、金融、学術が盛んでした。織物、薬の生産地でもありました。この地についてはコロサイ人への手紙4章15～16節にも出てきます。この地に設立されていた教会への、手紙です。その送り手は、アーメンである方、忠実で、真実な証人であり、神に造られたものの根源である方とあり、キリストご自身であることは言うまでもありません。
- ②冷たくも熱くもない(15)「**わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。**」ラオデキヤの教会の信仰とその行いは、冷たくも熱くもないと指摘されました。良く言えば、それなりに形は整えているのです。しかし、悪く言えば、熱くあるべきところでは、熱が入らないのです。ということは、その信仰はいい加減で、そこに自分の命がかかっていないということです。人の顔色、世間体、利得などが先になり、キリストを見上げることを阻んでいるのです。四つの種のたとえ話(マタイ13章)でいえば、いばらが成長をとめてしまうようなものです。キリストは、冷たいか熱いかであってほしいと語られるのです。
- ③口から吐き出そう(16)「**このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。**」冷たくも熱くもないというのは、生ぬるいということです。孔子は「中庸の徳」ということを言います(「論語」7:29)。「過ぎたるは及ばざるごとし」とも言います。それには根拠と確信というものがある中庸ですが、ここにある生ぬるさとは、キリスト信仰における、中途半端さが指摘されているのです。そして、「わたしの口から吐き出そう」という厳しい注意がなされているのです。

2. ラオデキヤ教会に必要なもの (17-18節)

- ①自分知らず(17)「**あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、裸の者であることを知らない。**」ラオデキヤは実際のところ、経済的には富んでいました。物質的に豊かな人はどうしても、そこに依



存しやすいのです。「金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい」(マルコ 10:25)とある通りです。しかし、自らの実像を見失っていることが多いのです。実際は、みじめで、哀れで裸であることに気が付いていないのです。

- ②本物の金を (18)「わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買いなさい。」主からの忠告です。豊かな人々に、実際の金ではなく、キリストが精錬して下さる金を買いなさいというのです。見えざる本当に価値ある金です。それこそが、豊かになる道であることが示されるのです。
- ③白い衣、目に塗る薬を (18)「また、あなたが裸の恥を現さないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。」織物業が盛んな地の民に、裸を覆う白い衣を買えとは、主から罪の聖めをいただけということでしょう。また、薬業が盛んな地の民に、魂の目が見えるようになるための目薬を買いなさいと勧められるのです。

3. 心の戸を開けること (19~22 節)

- ①悔い改めよ (19)「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。」厳しい戒めの言葉は、ラオデキヤの教会を愛しているからなのです。だからこそ、懲らしめと思われる言葉が伝えられているのです。だから、今こそ悔い改めなさい。熱心に悔い改めよと言われるのです。
- ②食事をともに (20)「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」キリストがこの教会とそこに連なる者たちの、戸の外に立ってたたいてくださるというのです。心の戸でありましょう。シャロームという言葉が伴っているのかもしれませんが。戸をあけるなら、主は中に入って食事を共にして下さるというのです。ザアカイの時もそうでしたが、主がその人の家の中に入ってくださいというのは、最高の出会いと交わりの時なのです。
- ③わたしの座に (21~22)「勝利を得る者は、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィアの教会にも「勝利を得る者は」と言われ、それぞれに約束が伝えられていました。ラオデキヤの教会には、「わたしの座に着かせよう」という破格のものでした。キリストが父の御座についたのと同じだというほどの特別待遇です。そして、耳のある者は、よく聞きなさいというのは、これまでと同じ励ましのメッセージでありました。

《結論》

今朝のところまでで、ひとまず今回の黙示録の学びは終わりです。七つの教会への手紙を見てきましたが、今日はその最後でラオデキヤの教会へのものです。他の教会に対しては、いくらかの良き点を認めていただいていたのですが、ラオデキヤ教会については、あたまから非難がなされ、長所を言うていただけないのです。

ところで、私たちの教会では風呂の湯の温度が高いのが好きな人がいますね。私などはぬるめのお湯が好きです。しかし、温泉で、熱いお湯に入る時があります。なかなか入れませんが、入れば体の芯まで温まりすきとした感じになることは知っています。思想的な面でも熱い者同士は理解できるようです。最近、50年も前に三島由紀夫と全共闘が、公開討論をした時の生録画が映画化されたということで話題になっています。思想的に見れば、極右と極左ですが、思想に命をかけるという点において、両者は理解し合っているのです。当時、「ひよりみ主義」と全共闘の人々から攻撃されている人々がありました。彼らから見れば、徹底していないと見たのでしょう。

ここで、ラオデキヤの教会は生ぬるいと指摘され、熱いか冷たいかであってほしいと勧められています。迫害が激しくなる初代教会の時代ですから、余計にいい加減な信仰では教会も信仰者も立ち行かなくなっていました。だからこそ、厳しいお言葉が容赦なく与えられている面もあるのでしょうか。

しかし、今朝の個所で興味深いことは、そんな信仰面で強い注意を受けているラオデキヤの教会に対して、主は他の教会にはない特別の声掛けをしてくださっているのです。もちろん、まずは熱心な悔い改めが勧められます。その上で、あなたの心の戸をたたいてるよ、開けるなら、一緒に食事をするよというお言葉です。なんと素敵なお言葉。ありがたいお言葉です。私たちがいかに弱く、罪深く、ぼんくらであっても、悔い改め、心の戸を開けていくなれば、主は私たちの中に入ってくださるというのです！あの放蕩息子に対して、父親が心配し、戻って来た時には歓迎したように、どんなに不信仰な者も心を開いていくなれば、主は大きく手を広げて迎えてくださるのです。そして、ラオデキヤの教会に「わたしの座につかせよ」とまで言うていただいたような、恵みを賜ってくださいというのです。

ですから、私たちも心を開いて主の前に出たいのです。そして、霊の耳を澄まして、主がご挨拶をくださりながら、戸をたたいてくださっていることを察知するならば、心の戸を開いて、主を迎え入れていきたいのです。

『「帰れや、我が家に、帰れや』と主は呼びたもう」(讚美歌 517)

